

「おびておん」

いま「理系」

「おびておん」には役立たないけど大事な科学「おびておん」の基礎科学の意義と面白さを、講演会などを通じて社会に理解してもらう活動を続けています。生命とは何？ 宇宙の起源は？ そんな素朴な疑問を大切に、「へー、そんなんだ」「不思議だなあ」との驚きや、うきうきした気分を味わってほしい。

お祈りが日課のカトリック系の学校で育った私は、神様とは何か、人間はなぜ存在するのか、宇宙はどのようにできたのかといった疑問を抱けていました。そんな中学生のころ、ビッグバン理論を知り、物理学はどうした問題に切り込めるんだと心底驚き、科学の面白さに目覚めました。大学は理系に進み素粒子物理学を専攻、大学院ではニュートリノ実験に参加しました。現在は、科学コミュニケーションの研究・教育と、科学の楽しさを重要性を伝える活動をしています。

科学と社会の関係を問い直すのが科学コミュニケーションです。科学は社会と離れて存在するのではなく、研究を進めるにも政府や市民の理解が不可欠です。科学の意義と成果を社会と共有し、科学の進むべき方向を科学者と市民がともに考える。科学者が社会的

東京大大学院理学系研究科准教授

横山 広美さん(35)



「不思議だなあ」を等身大で

責任を自覚し、説明責任を果たすよう促す。それらの方法を探るのが私たちの研究の目的です。

東日本大震災は、科学や科学コミュニケーションが果たすべき役割を改めて自覚させるものでした。想定外の大津波で甚大な被害が生じたうえ、原発事故も起き、その収束に苦慮している。科学に対する期待が裏切られたと感じた方も多かったかも知れません。科学は市民に過大な期待を抱かせてきたのではないか。科学者は白黒がはっきり言えない事柄について慎重に答えてきたつもりでも、それでもなお地震予知ができたり、原発は絶対安全であるかのように思わせてしまったりしていたのかも知れません。等身大の本当の科学の姿、日々進歩しているのが万能ではない、という科学の限界を示す努力が一層必要だと痛感します。

科学者が今ほど必死に、市民に貢献できることは何かを考え、科学を社会に生かす方法について考えたことは近年なかったと思います。すでに日本学術会議や学会の連合が、各種の提言や共同声明を発表し、現地調査などで科学の力を結集して被災地支援に取り組んでいます。また、多くの科学者が、市民が何を不安に感じ、何を知りたいと願っているかを把握することに努め、講演会やインターネットなどを通じて、放射能に関する正確な知識を提供したり、節電方法を解説したりするなど、情報の発信を行っています。

科学は人間を幸せにもすれば、原爆のような恐ろしいものも生み出しています。でも、市民とオープンな議論を積み重ねることで危険性は克服できるはずです。科学は人間の可能性や夢を示してくれる。科学がこの日本を支えてくれると確信しています。

聞き手 池田洋一郎
撮影 麻生 健